北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

後記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/8092

情緒障害教育研究紀要　第19号　2000年
Hokkaido Journal of Special Needs Education for Emotionally and Developmentally Disturbed Persons　No. 19　February 2000

後　記

A Postscript by the Editor

世紀の変わり目にあって、日本の有様は不景気の問題以上に、子ども達の生きる力、社会性、道徳性に問題を感じさせます。それはすなわち、社会の反映であり、一人ひとりの大人の反映であり、一人ひとりの私の生き様と責任の問題でありましょう。また、今の政治家と官僚の姿は、私たち国民一人ひとりの反映であると見るべきではないでしょうか。名古屋万博、吉野川河口堰問題にみられる建設至上主義、公共投資による赤字づくり、未来に責任をとろうとしない場当たり主義、これまた国民の意識の反映と見るべきでしょう。

理想を高く掲げ、私たちの一歩が社会変革の一歩と考えますと、この一歩の重みを感じます。その一歩の難しさ、「もっと心をこめて」、簡単な言葉が非常に難しいです。

さて、今年もまた大変充実し、学ぶことの多い年でした。特殊教育特別専攻科（情緒障害教育専攻）の教育研究活動は，非常に多くの学外の方々のご指導、ご援助によって成り立っています。講師の諸先生をはじめ，実習・実地指導受け入れ校の先生方には実践に根ざした講義、実習指導をいただきました。研究活動では本年もまた、多くの共同研究を行うことができました。ご指導、ご援助下さいました諸先生方皆様方に厚く御礼申し上げます。

私たちは、現場主義ともいうべき基本的考え方をもっています。すなわち、子どもに学び、現場に学び地域に学ぶことを第１にすることです。皆様方のご協力なしに運営は不可能なのです。

さて、情緒障害教育研究紀要第 19 号の巻頭論文には、柚木　馥先生から、歴史的な実践論文をいただきました。「札幌杉の子寮一年(1962 年～ 1963 年)の経過とその意義を問う」と題された実践は、現在の世界の趨勢をしめるインクルージョン理念を先取りする試みでありました。そこには今の障害児教育への痛烈な思いが込められており、その問いかけに私たち専門家は答えねばなりません。まず、小学校１年生から寄宿舎に入れることは、原則として廃止されなければなりません。地域ごとに養護学校的学級が設置されるか、ある

いは、学校の敷地内ではなく、別の通常の生活地域での家庭的グループホームで生活できなければなりません。また、校舎は、養護学校にとどまらず、通常の小、中、高校においても兵舎のようであってはなりません。このように突きつけられています。

高橋　渉先生からは本当の「学び」について、根元的な問いかけがなされました。あるいは、かっての大正期の新教育運動にすでに示されていた問いかけとも思えます。もしそうならば、さらに現在が厳しく問い直されます。

つづく5編は、養護学校、特殊学級、通常学級、あるいはLD児のための土曜教室の実践論文です。一つ一つの論文がよみごたえのあるもので、また、先生方の個性がよく現れて、学ぶところが多く、私たちの実践を振り返らせてくれます。

村田昌俊先生の論文は、本紀要唯一の不登校に関するもので、登校拒否学級の卒業生のその後の歩みについて貴重な報告がなされています。

つづく13編の論文は、本年から始まった文部省科学研究費による「地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究（Ⅱ）－幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおけるTEACCHプログラムの展開－」にかかわるものです。

村川哲郎先生からは函館幼児通園施設「つくしんぼ学級」における、寺尾孝士先生からはおしまコロニー居住施設における、富士本桂子先生からは特殊学級におけるTEACCHプログラム実践のマニュアル的論文をいただきました。いずれも長い実績をもとにまとめられ紹介されたものです。

志村克美先生からは、函館の国立北海道教育大学附属養護学校における、畑中雅昭先生、谷川　忍先生からは函館市立小学校特殊学級におけるTEACCHプログラムの手法を導入した実践論文をいただきました。いよいよIEPへの試みが始まったという実感があります。

旭川地区では、これまでの継続研究として旭川市立大有小学校特殊学級、旭川市立北星中学校と特殊教育特別専攻科とのTEACCHプログラムの手法を用いた共同研究がなされています（柏木論文、山下論文、賀川論文）。

また、本年度は、旭川地区の東川養護学校、鷹栖養護学校が共同研究者として参加してくれました。TEACCHを一つの地域システムとして捉え、地域を場とし、生涯にわたるケア体制を構築すること

を目標に据えるならば、狭く限定した TEACCH プログラムのみでなく、「地域を場とし、生涯を見据え、家庭と連携し、適切で、一貫性、継続性のあるケアを、チームワークによって、リレーする」、こういった療育・教育・ケアの方法を地域ぐるみで共有すべきではないでしょうか。旭川地区の東川養護学校、鷹栖養護学校はこのキーワードをもったすぐれた実践を行っております。その実践報告が佐藤満雄論文、高橋勝利論文です。

もう一つ旭川地区から、通級システムをとっている市内情緒学級在籍児の過去 25 年余の追跡調査がなされました。通級システムへの高い評価と、学校教育終了後にも問題が続いている例のあること、相談支援活動の必要性のあることが示されています。

つづく８編は特殊教育特別専攻科生のもので、うち４編は、旭川大学附属幼稚園との統合保育に関する共同研究（天池論文、川崎論文）、旭川母子通園センターとの多動児に関する共同研究（野田論文）、鷹栖養護学校との高等部における重い生徒に関する共同研究（駒野論文）であり、４編は、ライフステージごとの引継に関する研究、知的障害児の余暇研究、「知的障害に伴って支援を必要とする」人々の結婚について、世界の特殊教育を展望したインクルージョン研究です。各々刺激的な内容を含んでいます。

今年も、小田切正先生の菅季治；「文芸的心理学への試み」序説（その６）をいただきました。息の長い研究活動を見習わねばなりません。

昨年の後記に、紀要の創刊号から 18 号までの後記を見とおして、方向性が見えてきたように感じること、いろいろな方法のいいところをどんどん学ぶということ、現場主義は一つの方法論のみにては対応できず、いいものはすべて取り入れる姿勢が必要なこと、実践を通して、かかわり手の感性、感受性が深まっていかなければならないこと、はるか長い道のりとはいえ、かかわり手の人格の成長も問われるということ、教育は地域社会が核になること、子ども主体と遊びの尊重が述べられています。19 号において付け加えるべきことは、はっきりとものをいわねばらなぬことです。専門家としてあまりにものを言わなかったという反省を強いられています。

例年１月は特殊教育特別専攻科生にとって特別な季節です。自分の論文を紀要原稿にまとめ、ワープロに打ち、一太郎に変換し、体

裁を整えます。さらにそれだけに止まらず、投稿して下さった貴重な論文を製版用原稿に整え、校正し、最終原稿を印刷所に渡す、これを特専科生全員でするのです。その尽力に、心から感謝いたします。

2000年1月30日

古川　宇一(Uichi Furukawa)

殊教育特別専攻科第８期（情緒課程１９期）

成田信尊
天池優子
猪股みゆき
井理聡昭
小田原峰広
賀川由起
柏木一美
川崎史園
駒野　司
中山孝之
野田左希子
山下博美

北海道教育大学旭川校
障害児教育研究室
主任　古川宇一
内島貞雄
末岡一伯
大崎功雄
英文題名校閲
Beaty　Shawn
(Advisor on English Titling)